

# Y A

2006  
No.  
22



これは世につたえておきたい  
かたっておきたい  
わが胸の底から真実のおもい  
人生幾山河のめぐりあい  
あの日の風やひかり そして空のひとひら  
哀歎のかがり火に生きた幾年月の路  
「自分史図書館」は その証言館です。



秋の入口で  
虫が鳴いている  
やれやれ…  
そこでわたしもつづやいてみる  
やれやれ…  
やがてすべてのやれやれが地に満ち  
せいっばいの花を結ぶ  
花は野菊か  
コスモスか  
空にはすつきり  
月も出る

詩 やれやれ

深町準之助



○熊本土族隊

甲斐 弦

## 私の稀覯本ノート その22

### ○梅崎春生『櫻島』

椎窓 猛

去る8月15日、鹿児島島の櫻島に、この作品を記念した文学碑が建立されたが、式に列し、作家梅崎さんが亡くなられて40年と耳にし、歳月の流れの迅速なことを衝撃的に感じた。

しかし作品『櫻島』は今読み返しても鮮烈でみずみずしい。私が所持している『櫻島』は、昭和24年、月曜書房の発行。戦後混沌な社会状況のなかでの印刷、本づくりの様子もうかがわれ、ここにも「時代」を感觸する。古本然としながら、手にとればある「おもむき」が漂っている。

梅崎作品では、『櫻島』『日の果て』など堂々した力作のかたわらにある『輪唱』『Sの背中』などの少々

うらさびしい寓話風のユーモアを、私はとくに愛読した。

後日、懇親の席でお会いした奥さまからていねいな礼状をいただいたが、末尾に「福岡には、春生の親友も皆鬼籍の人となられ、寂しい限りでございます」としたべめられていた。戦後も61年となれば——とまた思う。  
(自分史図書館長)

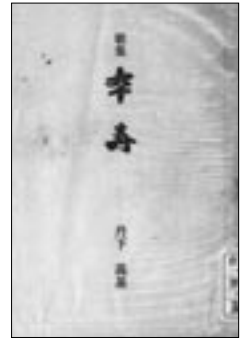


著者は熊本商大名誉教授。発行人は葦書房の久本三多さん。昭和62年発行。久本さんは48歳の若さで亡くなっているがこの頃は健在であったと思われる。久本さんは確かに「本づくり」にかけては達者腕前であったと、この一冊を手にとっても感じとられる。

表紙の写真は、吉住美昭さん。これもまた内容にマッチしている。

帯に、「明治10年の冬は寒く、春は遅かった——。茫々たる風景の向う側から聞こえてくる秘やかな、しかと確かな歴史の跫音。」

甲斐教授は、熊本土族の背骨を見究め、歴史の流れゆく血脈を真摯に論述されている。貴重な名著である。



○老兵エッセーに突撃 中村 敦

著者中村さんは、横浜在住。敗戦により、海軍兵学校から水産講習所へ。漁業会社に30年勤務。古稀を迎えてエッセー修業。73歳の誕生を記念しての出版とのことである。46篇のエッセーが収録されているが、いずれも、「突撃的」快作ぞろいで、楽しく読める。

その一例。「こんなに楽しい家事全般を、今日の今日まで、数十年も女房に独占されていた事に気付かなかったとは迂闊千万。女房族が長生きする訳が分かった。男女雇用均等法を言うなら、まず家事も男性に開放せよ。さあて、そろそろ晩飯の支度にかかるか。」「涼しさや浪々の身の昼寝かな。」といった調子――。

○学校、ここがおかしい！ 観世 広

観世（かんぜ）さんは、教師生活35年で、若年退職、その後、テレビ、マスコミ、講演などで活躍。辛口評論家として知られる。

その1例～教頭昇任間近なA氏。「もはや教育や学校のあるべき理念などより、上司へのひたすらな忠勤。」

また大体において上に対して卑屈な人間は、下の者へ冷酷、薄情。こうして眼前の小さな目的のために手段を選ばないという、視野の狭い人間へ転落のセンスも少なからず

「小心で視野が狭く教育や子供のことは考えていないくせにやたらと権力をふるいたがる校長――」読んでいて、観世先生は、いい校長先生とのめぐりあわせが皆無ではなかったか。たまには、名校長もいるものですが――。

古稀を迎へ吾が来し方を偲びつつ退職願いま書き終る  
鳥のため残し置きたる庭の柿三個となりて大寒迎ふ  
二十五回忌に妻の位牌を飾りつつ人に語らぬ事思ひある  
こだまして巨木倒るる音を聞く昭和の終り雲重き朝  
物足りて心貧しくなりゆくを言ひて詮なき老の寂寞

（歌人は今治市の人、海軍兵学校卒）

歌集 幸寿

丹下 藹基

引き潮の干潟に立てる白鷺はくちばし高く青空を刺す  
祖国去る孤児のかなしみ辿るごと我が満州確かめてをり  
一日を柚子湯に浮かべ揺らしをり悔いも誇りも薫りにひたし  
三十年の教職終へし妻の背の結び目のエプロンまぶし  
音もなく水際を走る鶴鴿におのがこころの古き葉の落つ

歌集 蒼き座標

野中 暁

（佐賀・小城郡小城町在住）



蔵書目録③ができました ￥160 送料込(郵便切手可)

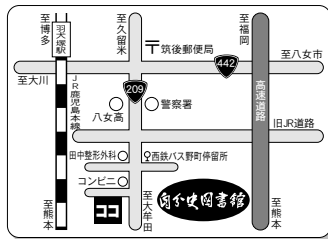
向分史図書館

入館無料

開館／午前9時～午後5時00分

休館／日曜、土曜日、祝祭日、年末・年始、その他休館することがあります。予めご確認下さい。

貸し出しはしていません。



〒833-0032 筑後市野町423-8  
TEL・FAX 0942-53-8122  
西鉄バス野町停留所より徒歩5分

インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan

受贈図書紹介は今月休みます。

編集掌記

▼また秋に会いて夕焼雲を見る  
今夜から酒つまくなる  
天の川  
ひそかに俳句をつくりはじめて幾春秋か。私の俳句を認めていたゞいたのは北九州『天籟通信』の穴井太師。穴井先生は実に丹念に装幀し、序文をしたゞめていたゞき、句集『山峡ろまねすく』を刊行してもらったが、その後、穴井先生も逝かれて、十年余。星を見あげながら、お酒

一献といいたるところだが、九月中旬には、胃袋に内視鏡を挿入の診断。以前に、「胃袋に穴あく気分かなかなや」といった句もすでに作っていて、その予感的中とは、ナサケない話です。（椎）

◇ ◇ ◇  
師走には”人生史サークル“会誌『黄檭』十周年記念行事只今企画中です。ほんとうに「継続は力」です。

